

授業科目名	日本美術史	担当教員名	志邨 匠子
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	必修科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1・2年次前期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ この授業では、先史時代から近代に至る日本美術の歴史を概観する。日本美術に関する基礎知識を習得するだけではなく、鑑賞を通じて、表現上の特色などを、自ら発見し理解に至ることを目標とする。			
授業の概要 縄文時代から近代に至る日本美術（絵画、彫刻、工芸）について、主要作品を例示しながら授業をすすめる。また日本美術をより深く理解するために、美術作品に関する専門用語、作品の主題や背景についての解説をおこない、各時代の美術と社会との関係や異文化との交流など、アジアや西洋との関係も視野に入れる。			
授業計画 第1回 縄文時代－土器、土偶、 第2回 弥生・古墳時代－土器、埴輪 第3回 飛鳥・白鳳時代－仏教の伝来 第4回 奈良時代－唐文化の影響と天平美術 第5回 平安時代Ⅰ－密教伝来と貞観彫刻、藤原美術 第6回 平安時代Ⅱ－和様の形成と絵巻 第7回 鎌倉時代－鎌倉リアリズムと肖像画 第8回 室町時代Ⅰ－水墨画の移入 第9回 室町時代Ⅱ－水墨画の展開と狩野派 第10回 桃山時代－障壁画と装飾性 第11回 江戸時代Ⅰ－狩野派の展開と琳派 第12回 江戸時代Ⅱ－文人画と写実主義 第13回 江戸時代Ⅲ－町人文化と浮世絵 第14回 明治時代Ⅰ－油絵の移入と新しい日本画の創出 第15回 明治時代Ⅱ－近代彫刻のはじまり 定期試験			
履修上の注意 授業時間外に、授業で扱った作品を再確認しておくこと。			
テキスト 使用しない。(適宜、授業内でプリントを配布する)			
参考書・参考資料等 授業内で適宜紹介する。			
学生に対する評価 定期試験により評価する。			

授業科目名	東北生活文化論	担当教員名	石倉 敏明
授業科目区分	教養科目—歴史と文化		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1・2年次前期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ <p>本講義では秋田を中心に、東北地域全般の特色ある生活文化を考察の対象とする。縄文時代から現在に至るその生活文化史を概観すると共に、特に秋田地域で育まれてきた生活様式や経済活動、祭礼、行事、芸術、思想について、周辺地域の特色とも比較しながら考察する。</p>			
授業の概要 <p>この授業では人類学をはじめ考古学、民俗学、神話学、生態学などの横断的な見地から東北地方の実態を見つめ、地域文化の独自性をさまざまな角度から検証する。また、この地域の里山・里海・里川での生活文化を、日本列島を越えて東アジアや環太平洋の文化的なつながりの中に位置づけ、人類の普遍性の中で地域社会の文化的なルーツについて解説する。</p>			
授業計画			
第1回～2回	世界のなかの「東北」	環太平洋における縄文文化	
第3回～4回	源流としての狩猟採集生活	ブナ帯の生態、狩猟採集文化について	
第5回～6回	神仏和合の山々	出羽三山と鳥海山他、山々の神話学	
第7回～8回	死と再生の森	曼荼羅と母胎、ウバサマ信仰・ハヤマ信仰の広がり	
第9回	里山／里川／里海	身近な自然との関わり、鮭と熊の神話	
第10回	東北的アニミズム	草木供養塔と本覚思想	
第11回～12回	神話・芸能・伝承	だんぶり長者伝説と大日堂舞楽	
第12回～13回	来訪する精霊	ナマハゲからサンタクロースまで	
第14回	鎮魂と創造	3.11 以後の東北像	
第15回	「東北」から始まる未来	魂の東北に向けて	
(定期試験)			
履修上の注意 <p>配布資料のほか、適宜映像資料を使用します。なお、新しい研究成果を授業に反映させるため、各回の内容や順番を変更することがあります。</p>			
テキスト <p>各回のテキストは適宜配布します。</p>			
参考書・参考資料等 <p>岩崎敏夫『東北民間信仰の研究』、中沢新一『哲学の東北』、千歳栄『山の形をした魂』、田附勝『東北』、山内明美『子ども東北学』、石倉敏明・田附勝『野生めぐり』等。</p>			
学生に対する評価 <p>授業への取り組み 30% 課題の成果(試験、レポート) 70%</p>			

授業科目名	文化人類学特論	担当教員名	石倉 敏明
授業科目区分	教養科目—歴史と文化		
履修区分	選択科目	授業形態	講義（一部演習・実習）
配当年次・学期	3・4年次前期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ <p>この授業では現代の人文諸科学の成果を参照しながら、生命を懐胎し、出産し、育むものであり、また死をもたらす恐ろしいものとしても表象される女性や母性についての神話的イメージを探る。人類の想像力や創造性と女性性一般の関係を考察することによって、「人間が生まれること」の意義やその芸術表象の歴史を探究し、生態系と人間、古代的なものと未来的なものを繋ぐ思考力や表現力を養う。</p>			
授業の概要 <p>本講義では主に女性性を探究の主題としながら、神話研究を通して、人びとの生活にとって欠かすことのできない自然との関わりについて探究する。動物や植物といった非人間の生物、山や海といった自然景観、木材や毛皮といった材料、「山の神」等の聖性表現に着目し、その根源にある産出力と破壊力、創造性と否定性を理解する。また、日本列島の民話や伝承のなかで生き続ける「贈与する自然」のイメージを、より深く理解することを目指す。</p>			
授業計画 <p>第1回～2回 懐胎すること、生まれること ～「贈与」の根源性 第3回～4回 エロティシズムについて ～他者の受け入れと二重の生命 第5回～6回 母子間の潜在空間 ～ ウィニコット、メルツァーの研究から 第7回～8回 母子神の世界的展開 ～「桃太郎の母」の環太平洋的広がり 第9回～10回 「包み」と「結び」 ～デザイン化された産出性 第11回～12回 芸術・贈与・貨幣 ～「価値を生み出すもの」としての芸術 第13回～14回 「他者を食べる」／「他者を産む」 ～宇宙的食物連鎖について 第15回 まとめ ～「内なる野生」への通路を拓く （定期試験）</p>			
履修上の注意 <p>新しい研究成果を授業に反映させるため、各回の内容や順番を変更することがあります。</p>			
テキスト <p>各回のテキストは適宜配布します。</p>			
参考書・参考資料等 <p>ネリー・ナウマン『山の神』、中沢新一『カイエ・ソバージュ』『精霊の王』、石倉敏明他『折形デザイン 研究所の新・包結図説』、マーク・シュル『芸術と貨幣』、ベルティンク『イメージ人類学』他。</p>			
学生に対する評価 <p>授業への取り組み 30% 課題の成果（試験、レポート） 70%</p>			

授業科目名	美術理論・美術史	担当教員名	天貝 義教、井上 豪
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—美術理論・美術史科目		
履修区分	必修科目	授業形態	講義（オムニバス）
配当年次・学期	1年次前期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ 人間に固有の美術の基礎概念を理解するとともに、日本をふくむ東洋と西洋における美術創作の歴史を学ぶことによって、美術についての基礎的な知識を身につけることを目指す。			
授業の概要 美術とは何か、美術の歴史とはなにか、という基本的な問題について、平易に解説する。古代ギリシアから20世紀の抽象画にいたる西洋美術の様式変遷と日本をふくむ東洋美術の様式変遷を概説する。			
授業計画 第1回 美術の基礎概念について 第2回 古代ギリシア・ローマにおける古典的な空間表現様式 第3回 中世キリスト教美術における空間表現様式 第4回 ルネサンスにおける遠近法的空間表現様式の発見 第5回 バロックにおける遠近法的空間表現様式の発展 第6回 ロマン主義と表現主義における主観的空間表現様式 第7回 モダン・アートにおける新しい空間表現様式の登場 第8回 まとめ 第9回 古代インドのストゥーパ浮彫 第10回 ガンダーラ美術 第11回 シルクロードの仏教美術 第12回 中国初期仏教美術 第13回 雲岡石窟と龍門石窟 第14回 日本への仏教伝来 第15回 まとめ			
履修上の注意 教員免許状取得のための必修科目。各回の講義内容について予習と復習を必ず行なうこと。			
テキスト 教科書は特に定めない。			
参考書・参考資料等 A・ドルナー著『美術を超えて』 その他の参考文献・資料は授業において適宜紹介する。			
学生に対する評価 授業への取組み(40%)、レポート(60%)を基本に総合的に評価し、60点以上を単位認定要件とする。			

授業科目名	東洋美術史	担当教員名	井上 豪
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	1・2年次前期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ <p>中国の古代美術を概観する。数千年の歴史をもつ中国美術は時代と共に姿を変え、周辺民族とともにアジア文化の基層を形作ってきた。古代作品の数々は、我々の「失われた原点」をそのまま体現した貴重な遺産といえよう。</p> <p>本講座ではスライドによる作品紹介と共に、文献や考古資料を用いた文化史的背景の考察も重視する。各時代特有の美術表現と、それを生んだ古代社会の風土や社会の在り方を学び、美術表現の持つ「世界観」についての理解を目指したい。</p>			
授業の概要 <p>中国の古代美術を年代順に取り上げ個別に紹介する。スライドや配付資料を用いた作品解説だけでなく、考古学の知見に基づく遺跡の概要や文学史・哲学史から見た当時の文化的背景の考察なども重視、総合的な見地から美術表現とは何かを考えていきたい。</p>			
授業計画 第1回 序～古代美術と現代社会 第2回 殷周青銅器 第3回 三星堆遺跡と長江文明 第4回 曾侯乙墓 第5回 始皇帝陵 第6回 兵馬俑坑 第7回 馬王堆漢墓 第8回 馬王堆帛画 第9回 満城漢墓 第10回 龍と雲気文 第11回 魏晋南北朝の書画と画論 第12回 石棺床と胡人たち 第13回 唐代壁画古墳 第14回 法門寺と正倉院 第15回 まとめ			
履修上の注意 講義は一回完結の「読み切り」形式で進める。欠席しても次回の講義に支障は出ないが、欠席した回の内容は取り返しが利かないので注意されたい。			
テキスト 内容に応じ毎回資料を作成、配付する。書籍等のテキストは使用しない。			
参考書・参考資料等 必要に応じ講義の中で紹介する。			
学生に対する評価 試験の成績に授業態度を加味し、授業への取り組み20%、試験成績80%として採点する。単位認定要件は100点満点で60点以上とする。			

授業科目名	デザイン史特講	担当教員名	天貝 義教
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	2・3年次前期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ この授業では、日本とヨーロッパとのデザイン交流についての基礎的な知識を身につけるとともに、今日におけるデザイン活動についての国際的視野を広げることを目的とする。			
授業の概要 明治維新から第二次世界大戦後までの日本とヨーロッパのデザイン交流の今日的意義について、主要な万国博覧会への参同とヨーロッパへの留学生の派遣を手がかりにしながら講述する。			
授業計画 第1回 はじめに 文明開化と殖産興業のもとの応用美術の振興 第2回 ウィーン万国博覧会プログラムと日本語「美術」 第3回 ウィーン応用美術博物館について 第4回 ウィーン応用美術大学について 第5回 平山英三のウィーン留学 第6回 平山英三と松岡寿の工業意匠概念 汎美的意匠概念 第7回 日本におけるアール・ヌーヴォーとセセッションの流行 第8回 安田禄造のウィーン留学 経済的工芸概念 第9回 東京高等工芸学校教員のヨーロッパ留学 第10回 アーツ・アンド・クラフツ運動 『民衆の芸術』 第11回 アーツ・アンド・クラフツ運動 『ユートピアだより』 第12回 ドイツ工作連盟と工房運動 第13回 民芸と産業工芸 第14回 第二次大戦後の日本におけるモダン・デザインの理念 第15回 まとめ			
履修上の注意 各回の講義内容についてテキストを手がかりにして予習と復習を必ず行なうこと。			
テキスト デザイン史フォーラム編『国際デザイン史』			
参考書・参考資料等 岩波文庫版『民衆の芸術』 岩波文庫版『ユートピアだより』			
学生に対する評価 授業への取組み(40%)、レポート(60%)を基本に総合的に評価し、60点以上を単位認定要件とする。			

授業科目名	日本建築史 1	担当教員名	澤田 享
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	2・3年次前期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ 古代から中世までを通し、主としてわが国の建築を歴史的に理解する。 建築の歴史を基礎知識として身に付けるとともに、それ等を正しく人に伝えることが出来るようになること。 ・テーマ 日本伝統建築 文化財としての建築			
授業の概要 古代から中世までを通して、わが国の建築の歴史的な理解を深める。すなわち古代 1：先史/仏教建築の導入とその技術・技法。古代 2：寺院建築の技法/平城京・地方官衙（秋田市を含む）。古代 3：寺院・神社の多様化（特に様式についても触れる）。中世 1：中世における建築様式の流れ。中世 2：中国からの新様式の輸入（天竺様・唐様）の導入および和様の展開。中世 3：折衷様の発生。中世 4：中世社寺建築の技法と意匠。等について歴史のかつ様式の変化について学ぶ。			
授業計画 第 1 回 古代 1：先史建築の発生と発達の要因（縄文、弥生時代の建築） 第 2 回 古代 2：神社建築の成立/神社の起源、神殿の形式 第 3 回 古代 3：飛鳥・奈良時代の寺院建築/法隆寺、奈良時代の寺院建築の様式 第 4 回 古代 4：都城の制/都城の建設、都城の制、中国の都城と日本の都 第 5 回 古代 5：平安時代の寺院建築/密教の伝来と密教建築、浄土教の寺院建築 第 6 回 古代 6：神社建築の発展/奈良時代の神社建築から平安時代の神社建築 第 7 回 古代 7：古代の住宅建築/宮殿、古代の住宅様式/庶民の住宅 第 8 回 中世 1：中世における建築様式の流れ/建築界の動向と建築様式、構造 第 9 回 中世 2：中国からの新様式の導入 1/天竺様(大仏様)建築 第 10 回 中世 3：中国からの新様式の導入 2/禅宗の伝来と唐様(禅宗様)建築、伽藍の制について 第 11 回 中世 4：和様と新様式の混合(折衷様)の出現と展開 第 12 回 中世 5：中世社寺建築の技法と意匠 第 13 回 中世 6：中世の住宅建築/中世の住宅様式/庭園建築/庶民の住宅 第 14 回 中世 7：社寺建築の細部意匠の特徴 第 15 回 まとめ (定期試験)			
履修上の注意 テキストは毎回必ず持参すること。			
テキスト コンパクト版 建築史[日本・西洋] 彰国社 3,240 円、日本建築史図集 彰国社 2,700 円、自作プリント (適宜)			
参考書・参考資料等			
学生に対する評価 小レポート 20%、本レポート 80%で評価し、100 点満点で 60 点以上を単位認定とする。			

授業科目名	日本彫刻史	担当教員名	井上 豪
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	2・3年次前期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ 仏教彫刻を中心に日本彫刻史の流れを概観する。飛鳥時代の仏教受容に始まる日本の仏教美術は、大陸の先進文化を吸収しながら常に時代の先端として古代美術の世界を牽引してきた。本講座では日本を代表する名品について理解を深め、同時に宗教彫刻が表現する「時代の精神」について学びたい。様々な角度から総合的な彫刻史の理解を目指すのが目標である。			
授業の概要 主に仏教美術の受容期と定着期に目を向け、仏像の名品を解説する。古代美術はどのように受容され日本の中でどのような流れを生んできたのか。スライドで作例の特徴を観察し、同時に文献資料などから制作事情や伝来など作例の背景を考えながら、時代の空気と不可分な仏像の表現を立体的に学んでいきたい。			
授業計画 第1回：序・仏教美術と宮廷美術 第2回：仏像の見方 第3回：仏教伝来と飛鳥寺の造営 第4回：法隆寺釈迦三尊像とその周辺～飛鳥止利様式 第5回：法隆寺四十八体仏と白鳳様式論 第6回：夢違観音と橘夫人念持仏～白鳳日本と唐帝国 第7回：山田寺仏頭～国家官寺の時代 第8回：薬師寺聖観音像と薬師三尊像～白鳳から天平へ 第9回：東大寺大仏とその周辺 第10回：菩薩と神将～天平リアリズムの世界 第11回：興福寺と唐招提寺の諸像～乾漆像の展開 第12回：一木造の諸像と貞観・弘仁彫刻 第13回：寄木造と定朝様式 第14回：運慶・快慶と鎌倉美術 第15回：まとめ			
履修上の注意 講義は一回完結の「読み切り」形式で進める。欠席しても次回の講義に支障は出ないが、欠席した回の内容は取り返しが利かないので注意されたい。			
テキスト 内容に応じ毎回資料を作成、配付する。書籍等のテキストは使用しない。			
参考書・参考資料等 必要に応じ講義の中で紹介する。			
学生に対する評価 試験の成績に授業態度を加味し、授業への取り組み20%、試験成績80%として採点する。単位認定要件は100点満点で60点以上とする。			

授業科目名	近代装飾デザイン史	担当教員名	天貝 義教
授業科目区分	専門科目—専門共通科目—美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	3・4年次前期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ この授業では、デザインにおいて形態とともに重要な意味を持つ装飾についての歴史的な意義を学び、今日における装飾の創作の意味について理解を深めることを目的とする。			
授業の概要 19世紀後半から20世紀前半までのヨーロッパにおける主要な芸術論にみられる装飾の意義を応用美術の観点から講述し、ラスキン独自の経済概念についても考察する。			
授業計画 第1回 はじめに 19世紀後半のヨーロッパ装飾論 第2回 歴史主義的装飾論 第3回 アール・ヌーヴォーの有機的装飾論 第4回 オットー・ヴァグナーの近代建築論における装飾の意義 第5回 ヘルマン・ムテジウスの工芸論における装飾の意義 第6回 20世紀前半の装飾論(1) アドルフ・ロースの装飾否定論 第7回 20世紀前半の装飾論(2) ル・コルビュジエの装飾芸術論 第8回 ラスキンの芸術論における装飾の意義 『近代画家論』『風景の真理と倫理』 第9回 『建築の七灯』『ビルディングとアーキテクチャ』 第10回 『ヴェニス石』『ゴシックの本質』 第11回 『芸術経済論』『実用と装飾の二大目的』 第12回 『この最後の者にも』『最大多数の高潔にして幸福な人間』 第13回 『ごまとゆり』『王侯の宝庫』『王妃の庭園』 第14回 『フォルス・クラヴィゲラ』 「きれいな空気と水と大地」 第15回 まとめ			
履修上の注意 各回の講義内容についてテキストにもとづいて予習と復習を必ず行なうこと。特にラスキンの著作については邦訳のあるものは熟読しておくことが望ましい。			
テキスト デザイン史フォーラム編『近代工芸運動とデザイン史』			
参考書・参考資料等 岩波文庫版『建築の七灯』 モリス著『ゴシックの本質』みすず書房 その他の参考資料は適宜配布する。			
学生に対する評価 授業への取組み(40%)、レポート(60%)を基本に総合的に評価し、60点以上を単位認定要件とする。			

授業科目名	シルクロード図像学 1	担当教員名	井上 豪
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史科目		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	3・4年次前期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ 東西文明の行き交う絹の道は、インドから東アジアへ向かう仏教美術の道としても重要である。古代シルクロードの美術は、インドをはじめペルシアや西洋など様々な要素が混じり合い、それらが渾然一体となって独特の世界観を形作ってきた。本講座では仏教美術を中心にガンダーラから中央アジアにかけて作例を取り上げ、ペルシアやギリシアなど各地の遺品にその源流を辿りながら図像変遷の過程を追っていく。広大なユーラシア大陸を舞台に展開した、壮大な文化交流の姿について解説する。			
授業の概要 仏教美術に見られる様々なモチーフを毎回取り上げて解説し、図像バリエーションとその意味について考察する。スライドを用いた図像観察と配付資料による文化的考察を並行し、多角的視点から古代美術を捉えていきたい。			
授業計画 第1回 ガイダンス 第2回 概説・シルクロードの遺跡と美術 第3回 ストゥーパから五重塔へ 第4回 如来の服制と僧侶の袈裟 第5回 菩薩の宝冠 第6回 梵天と帝釈天 第7回 神将の甲冑 第8回 邪鬼と崑崙奴 第9回 飛天の姿 第10回 極楽のイメージ 第11回 須弥山と崑崙山 第12回 風神の色々 第13回 仏教における龍 第14回 如意宝珠の形象 第15回 まとめ (定期試験)			
履修上の注意 講義は一回完結の「読み切り」形式で進める。欠席しても次回の講義に支障は出ないが、欠席した回の内容は取り返しが利かないので注意されたい。			
テキスト 内容に応じ毎回資料を作成、配付する。書籍等のテキストは使用しない。			
参考書・参考資料等 必要に応じ講義の中で紹介する。			
学生に対する評価 試験の成績に授業態度を加味し、授業への取り組み20%、試験成績80%として採点する。単位認定要件は100点満点で60点以上とする。			

授業科目名	日本建築史演習	担当教員名	澤田 享
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史		
履修区分	選択科目	授業形態	演習
配当年次・学期	3・4年次前期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ わが国独自の建築の構造や造形の美しさを知ることは勿論のこと、それら建築建立の歴史的背景、建築様式、建築技法について理解を深める。 ・テーマ 日本建築の造形美 日本の文様と彩色			
授業の概要 授業は、日本独自の造形美を把握するため、国宝クラスの古建築を対象として、起し絵図風の模型の制作を行い、最終では細部意匠の一つである墓股を取り上げ、年代の形状、彩色について学ぶ。			
授業計画 第1回 国宝・平等院鳳凰堂の作図（起し絵図） 第2回 同建築の彩色と制作 第3回 // 第4回 プレゼンシートの制作（成果報告） 第5回 国宝・姫路城の作図（起し絵図） 第6回 同建築の彩色と制作 第7回 // 第8回 プレゼンシートの制作（成果報告） 第9回 国宝・清水寺本堂の作図(起し絵図) 第10回 同建築の彩色と制作 第11回 // 第12回 プレゼンシートの制作（成果報告） 第13回 国宝・平等院鳳凰堂の墓股のトレース 第14回 同彩色(纏縷彩色風) 第15回 プレゼンシートの制作 (定期試験)			
履修上の注意 日本建築史Ⅰ、あるいはⅡの単位を修得した上で履修することが望ましい。 また、製図用具、アクリル絵具、色鉛筆、マーカー 他			
テキスト 「折り紙建築」彰国社 1728円、適宜、自作プリントを配布する。			
参考書・参考資料等			
学生に対する評価 プレゼンシート 80%、授業態度 20%で評価し、100点満点で60点以上を単位認定とする。			

授業科目名	近代建築史	担当教員名	澤田 享
授業科目区分	専門科目－専門共通科目－美術理論・美術史		
履修区分	選択科目	授業形態	講義
配当年次・学期	3・4年次前期	単位数	2単位
授業の到達目標及びテーマ 19世紀後半の日本においては、洋風化が近代と同じ意味をもっていたので、建築にあっても洋風建築技術の輸入と普及が第1の目的となり、建築界もそれに沿って、近代建築へ移っていった。その様相について論じ、また日本近代建築の基礎になった欧米近代建築等についても併せて解説する。 ・テーマ 洋風建築と技術 日本の風土的条件に適した建築 欧米の近代建築の様式			
授業の概要 日本の近代建築は西欧化の時代、新技術と思想の導入、近代化の時代の3要素から成立する。したがって(1)産業革命と洋風化、(2)洋風建築の伝来と外国人技師の活動、(3)コンドルの来日と日本人建築家の育成、新構法の導入と日本人建築家の育成、(4)新構法の導入と耐震構造の工夫、(5)西欧近代建築思潮の影響、(6)分離派建築会、(7)関東大震災後の公共施設、(8)～(15)については欧米での主要な建築運動・様式などについて解説する。			
授業計画 第1回 建築構造の成り立ち（伝統工法と西洋工法の概説） 第2回 産業革命と洋風建築 第3回 お雇い外国人の建築 第4回 日本人建築家の誕生と建築 第5回 耐震建築構造とその発展 第6回 近代建築思潮と国際建築様式の展開 第7回 国民的様式の追求と様式の相対化 第8回 アーツ・アンド・クラフツ運動<西洋> 第9回 世紀末の装飾芸術 アールヌーヴォー 第10回 芸術の革新 ウィーン・ゼツェッション/ドイツ表現主義 第11回 前衛としての建築 ロシア構成主義/デ・ステイール 第12回 有機的建築 フランク・ロイド・ライト 第13回 バウハウス 第14回 建築の詩学・Less is More 第15回 まとめ （定期試験）			
履修上の注意 日本建築史Ⅰ・Ⅱの単位を修得した上で、履修することが望ましい。 テキストは必ず持参すること。また、適宜自作プリントを配布する。			
テキスト コンパクト版 建築史[日本・西洋] 彰国社 3,240円(日本建築史Ⅰ等で購入済みの場合は購入不要)、近代建築史図集 彰国社 2,484円、自作プリント(適宜配布)			
参考書・参考資料等			
学生に対する評価 定期試験 80%、レポート 20%で評価し、100点満点で60点以上を単位認定とする。			